

思いもかけず、安珍の名が出て来た……。

この僧は、安珍を知っている……！

僧の口から、安珍の名前が出た途端……清姫は、胸がキューンと締め付けられる気がした。耳元まで火照って……赤くなるのを感じる……。

「安珍さんなら、分かれ道で会ったぞ……。潮見峠の方へ行くとか……。」

えっ！……そんな……そんなばかな……。

清姫は、頭が真っ白になった……。

安珍が……安珍がいつてしまう……。安珍がいつてしまう……！

「もう半刻も前だ……。もう十二、三町は先へ行つとるはずだよ……。」

清姫は聞いていない……。反射的に、身体が……駆け出していた。

